

臨床検査値の活用に関する薬剤師の理解度調査

総合メディカル・ファーマシー中部（株）ハロー薬局 忠次店

岩田 歩実

【目的】近年、多くの病院で検査値印字の処方箋を発行している。薬局も病態の把握、副作用の早期発見、投与量の監査などのために、検査値の活用方法を理解する必要がある。そこで、各検査値が何の病態を評価する指標なのかについて薬剤師の理解度を調査し、今後の課題について検討したので報告する。

【方法】2022年3月、総合メディカル・ファーマシー中部の薬局に勤務する薬剤師139名にアンケートを依頼。調査項目は、薬剤師背景（実務経験年数、かかりつけ等担当患者数）、主応需先医療機関の診療科目、54種類の臨床検査値の理解度とし、薬剤師背景と理解度との関連を検討した。また、調査と同時に臨床検査値に関する学習資料を共有した。

【結果】アンケート回答率は71%（98名）。実務経験年数の内訳は1年未満8名、1～5年未満28名、5年以上62名であった。検査値54項目の理解度の平均は51%。普段対応することの多い生活習慣病に関する検査値は79%、腎・肝機能84%、腫瘍マーカー16%であった。実務経験年数との関連については、BNP・甲状腺関連・尿検査項目において1～5年未満の薬剤師は他と比べて20%以上理解度が低く、腫瘍マーカー・MMP-3・YAM値は、1年未満の薬剤師が他より20%以上理解度が高かった。主応需先医療機関に内科がある薬局に所属する薬剤師の生化学検査項目の理解度は69%、無い場合は41%、同様にBNPは内科あり45%、無し25%であった。かかりつけ等担当患者数では理解度に差が見られなかった。また、学習資料の共有により「再学習する良い機会になった」といった声が得られた。

【考察】検査値の理解度は項目により差があり、内科など検査値を多用する診療科の処方を多く対応してきたかどうかの経験による違いが大きいことが示唆された。このことから、実務経験年数の少ない薬剤師、応需先によって接する機会が限られる腫瘍マーカーなどについては、経験差を埋める研修の必要性があると考察した。